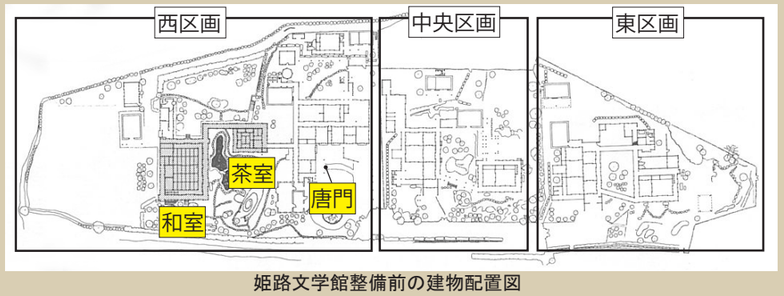
姫路城下と城下町

姫路は古代には播磨国府があり、中世には播磨守護の屋敷などが置かれた。近世の姫路城下は、その枠組みを一部残しつつ、播磨国に封じられた池田輝政が、姫路城と共に新たに形成したものである。輝政は、城の中心部とした姫山と鷺山の山麓を内堀で囲み、その外側に中堀で囲まれた家臣の上・中級の侍屋敷地を設けた。侍屋敷地には「大名町」「桜町」等の町名があるが、これは通称で行政単位の町名ではない。だから、城下町ではなく、城下である。さらに、中堀と惣構となる外堀の間には町人地が設定された。これがいわば城下町である。城下町には西国街道や但馬道、飾磨街道が引き込まれて、道沿いの町々は商業や運輸業などで繁盛した。

⑤望景亭



望景亭全景



姫路文学館整備前の建物配置図

望景亭は、姫路の実業家・濱本氏が、大正5年（1916）～昭和4年（1929）の約13年の歳月を費やし、姫路城を東に望む男山の南麓に別邸として建設した建物である。陸軍姫路第10師団騎兵第10聯隊隊長として着任した皇族、賀陽宮恒憲王（かやのみやつねのりおう）が滞在するなど、皇族家の宿泊所として利用されることも多く、姫路の迎賓館ともいうべき趣を備えていた。その後は売買により須鎗氏の所有となり、戦後は連合国軍に接収されたと伝わる。

昭和33年、姫路市がこの別邸を買収し、「男山市民寮」の名のもと、市営結婚式場「瑞泉閣」として利活用された後、昭和62年に当地が姫路文学館の建設用地に選ばれ、同館建設に伴い、修復・整備が行われた。姫路文学館は平成3年（1991）4月に開館し、かつて「男山別邸」または「男山御殿」とも呼ばれたこの邸宅は、裏千家十五世千宗室により「望景亭」と命名された。

当地は東・中央・西の3区画に分かれていた。そのうち、迎賓的な性格を持っていた西区画を保存し、中央・東区画の建物を解体・撤去し、建築家安藤忠雄氏の設計で文学館が建設された。望景亭の棟門および唐破風の玄関は、西区画にあったものを現在の位置に移築したもので、茶室および和室は修復整備された他、待合は意匠を引き継いで新築され、応接棟や管理室等も新築された。周囲の庭園を意識した開放的で大胆な意匠のなかに、書院欄間彫刻にみられる繊細さを合わせ持つ。また、柱や長押などの造作材に見られる目の込んだ柾目材や約10mに及ぶ長大な材が用いられるなど、現在では入手困難な良質な木材をふんだんに使用した上質な建物である。

⑥見星寺（けんしょうじ）



洪水供養碑

寛永12年（1635）を開基とするが、14世紀末には寺が存在したともされる臨済宗妙心寺派の古刹。

寛延2年（1749）、酒井家入部直後の姫路城下において、船場川が氾濫し、船場地域を中心に多数の死者が出た。境内には、安永2年（1773）に行われたこの洪水被害者の23回忌法要に際して、造られた供養碑がある。

⑦景福寺



景福寺山門



喜代姫・喜曽姫・婉姫の墓石

景福寺は14世紀摂津国川辺郡で創建。天正年間に加古川に移ったのち、慶長5年（1600）池田輝政によって坂田町に、宝暦4年（1754）酒井家の菩提寺として坂田町に同寺を残したまま、現在地に移転した。境内には姫路藩主酒井忠学の正室で、徳川家斉の娘喜代姫を始め、忠宝・忠績夫人の墓がある。景福寺山（江戸時代は主に増位山と呼ばれる）の山中にも、姫路藩主松平明矩や、姫路藩士の墓がある。

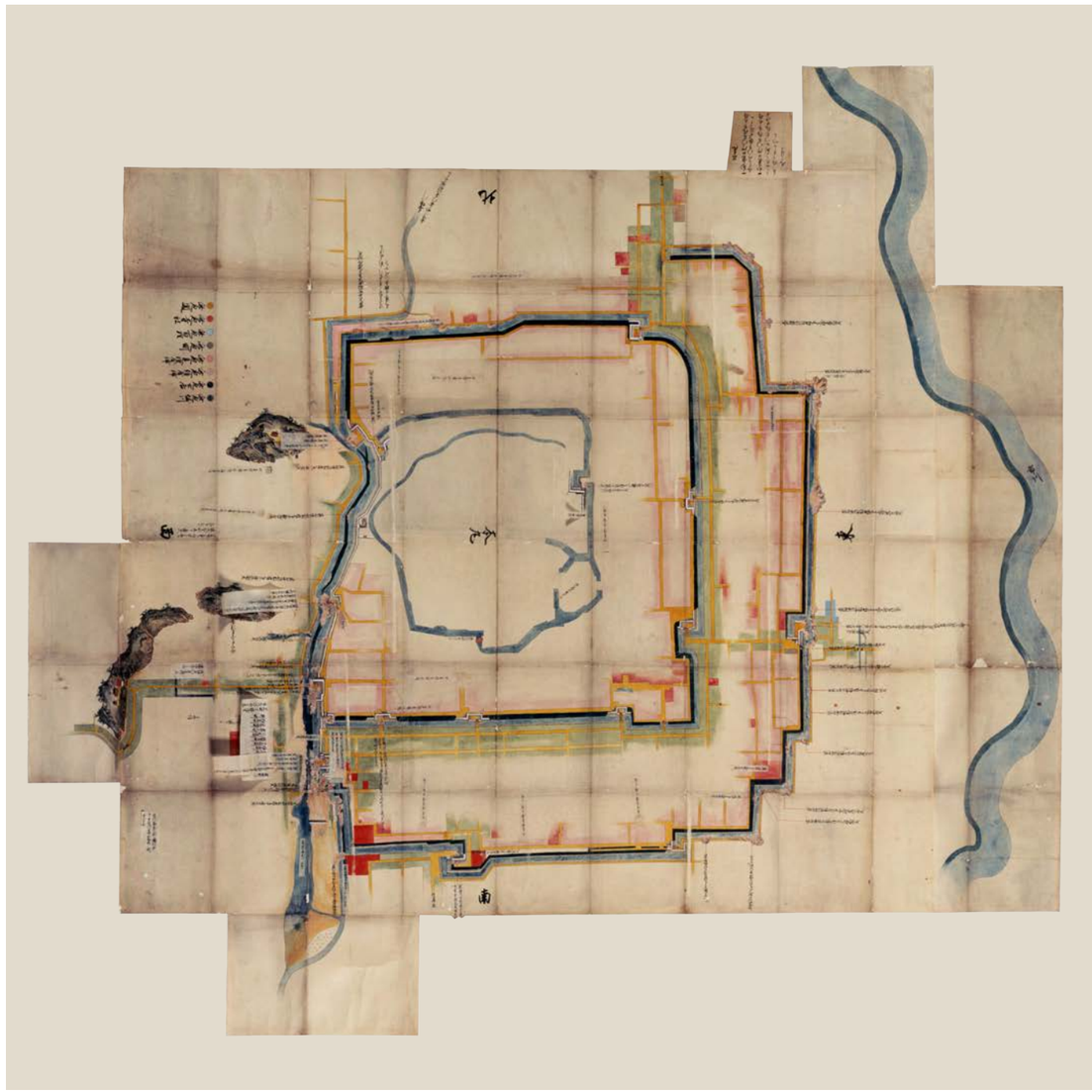
出典、資料名など

表紙：「姫路城下浸水被害図」（城郭研究室蔵）
①野里門：「姫路侍屋敷図」（城郭研究室蔵）、『大工源助倅　幾蔵図』（姫路市立城内図書館蔵）
③鷺の清水・塩煙（硝煙）蔵指図：「姫路侍屋敷図」（城郭研究室蔵）
④男山：「姫路御城廻侍屋鋪新絵図」（城郭研究室蔵）
⑤旧濱本家住宅配置図（姫路市立城内図書館史料整理担当蔵）

姫路市立城郭研究室
〒670-0012　兵庫県姫路市本町68-258 日本城郭研究センター内
TEL （079）289-4877 / FAX （079）289-4890
URL https://www.city.himeji.lg.jp/jyokakuken/

令和8年（2026年）10月24日発行

姫路城城下町を巡る（北西部）



「姫路城下浸水被害図」（寛延２年（1749）頃）

姫路市立城郭研究室

堀・堀跡
土塁・土塁跡
見学ルート
全コース：約2.2km
書写道
トイレ

清水地蔵尊
白川神社
① 野里門
② 不動院
③鷺の清水・塩煙（硝煙）蔵
④男山
⑤望景亭
書写道
清水門
北勢隠門
中堀
姫路城
南勢隠門
内堀
市ノ橋門
高田神社
⑦ 景福寺
⑥ 見星寺
舟入川

① 野里門



『姫路侍屋敷図』に
描かれた野里門



『大工源助倅　幾蔵図』に
描かれた野里門

野里門は、姫路城中曲輪に設けられた11ヶ所の虎口のうち北東に位置する。絵図には、内門と外門を設けた桝形が描かれているが、現在は全て撤去されている。また、北側の堀も埋められているため、旧状がほぼわからなくなっている。外曲輪から中曲輪へは、東から西に向かって中堀にかかった土橋を渡り、外門を通ると90度南に折れて内門を通り中曲輪へ入る構造になっている。外門は、脇門付高麗門、内門は脇門付櫓門で、外門内側に番所が置かれていた。

② 不動院



かつてこの地には、江戸時代初頭、池田輝政が美濃から招いた菊潭（きくたん）和尚開基の龍峯寺（後、国清寺）があった。龍峯寺には、池田光政が鳥取に転封するまで、輝政の遺骨が納められていたとされる（寛政重修諸家譜）。

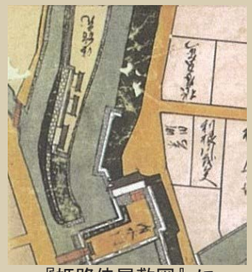
その後、男山の東斜面（現在の不動院の墓地）には、東山焼の姫路藩御用窯であった男山窯が設けられた。この時期の東山焼は、染付・青磁を特徴とする磁器で、姫路藩主酒井忠学と将軍家斉の娘喜代姫との婚儀のための贈答品もこの窯で焼成されたとされる。

不動院は、江戸時代は総社の境内地にあったが、明治3年（1870）に現在地に移った。

③鷺の清水・塩煙（硝煙）蔵



護岸の石垣

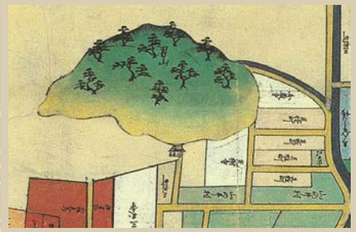


『姫路侍屋敷図』に
描かれた塩煙蔵

鷺の清水は、本多政朝が茶の湯に使う名水として、京都の町人に自慢した水として知られる。清水門の名称の由来にもなった。

清水門の北側、中堀と船場川に挟まれた中州には、江戸時代塩煙蔵（硝煙蔵・火薬庫）があった。その護岸の石積みが、いまも吉水地蔵尊北側に残る。

④男山



『姫路御城廻侍屋舗新絵図』に
描かれた男山



松平直矩寄進の石鳥居

男山八幡宮は、赤松貞則が鎮守として創建したとされる（播磨鑑）。八幡宮は、武運の神である八幡神を祀る宮であり、男山八幡宮も代々の姫路藩主から崇敬された。境内には姫路藩主が寄進した石鳥居が今も残る（延宝7年（1679）松平直矩、正徳6年（1716）年榊原政邦）。

男山中腹には、本多忠刻の妻、千姫が建立したと伝わる天満宮がある。